

兄泣かせ

「はあく、しかし毎度のことながら、戸締りもしねえで留守してるのんきなうちなんてのはなかなかないもんだねえ。空き巣稼業もラクじゃあねえや。あくあ。どつかにポンと財布でも落っこちてねえかなあ……落っこちてるね。拾ってくれと言わんばかりに、縞柄の財布がポンとひとつ道端に。いやあ、願い事は口に出してみるもんだ。こりやあきつとあれだな。俺の日ごろの行いをご覧になってた神様からのご褒美だ。

『おまえは空巢だ盗人だと言う割には、盗まれた者を困らせるようなお宝を盗った試しは一度もない。そうして腹をすかしながら町内を練り歩いているばかりで哀れなことだ。同じ足を棒にするなら、シジミか納豆でも売り歩けばいいものを。しかし初心を忘れず毎日よくがんばっているところは天晴だ。どれ、ひとつ願いを叶えてやろう』ってそういうお計らいだよ。

神様はちゃんと見てくださるんだねえ。ありがてえ話じゃねえか。それじゃあ遠慮なく（拾う）……いやに軽いね。（中を見て）なんだこりや。ウサギのフンみてえなのがご丁寧に包まれてやがるっきりじゃねえか。（匂いをかいで顔をしかめ）葉だなこりや。財布ってのは銭を入れておくもんだろ。よ。ぬか喜びさせやがって、神様もちよいといたずらが過ぎるんじゃないやねえですか？ あ、ひよっとして説教かい。

『人の金ばかりあてにしているからそういう目をみるんだ。真面目に働いていさえすりゃあ、そのうち銭のたんまり入った財布を拾わせてやる』ってそういう腹か。

いや、わかる。わかりますよ？ お立場上、ケチな空巢にいい顔なんてできやしねえ。だから、まずは人の道を説いてやろうって算段だろう？ そりゃ俺だってね、家族の一人もいりゃあ、身内を泣かせるような真似なんざあし

やしませんよ。ところがこちとら、妻子どころか、親兄弟もいやしねえ、天涯孤独の気楽な身なんだ。はずれた道とはわかっちゃいるが、一度っきりの人生、好き勝手やらせてもらいますんで、どうぞこれきりおかまいなく。おっと？ 不用心に戸を開けてるうちがあるじゃねえか。神様と長話なんかして見逃すところだった。(小声で) ごめんください。お留守ですか？ お留守ですね？ ちよいと空巢が入りますよ？ ……返事がないのはよい返事ってね。さてさて？」

「新吉！ いるのかい？ 新吉！」

「なんだ、厄介そうなのが来ちゃったよ」

「いるならとっとと顔を出しな！」

「えゝ新吉はただいま留守にしております……」

(戸を開けて入って来て)「ふざけんじゃないよ！ いるじゃないか！」

「いえいえ。間違いなくお留守だからこそこうしてお邪魔してる次第で」

「新吉。おまえいい加減におしよ」

「待つとくれよ婆さん。人違いだって」

「この小悪党め」

「うん、まあそいつは間違っちゃいねえけど」

「金返せ！」

「まだ盗ってもいねえのに？」

「なにをとぼけてやがんだ。目の悪いババアだと思って馬鹿にするんじゃないよ！」(杖で殴りかかる)

「痛え痛え！ 杖で叩くな、杖で！」

「まったく！ おまえにはがっかりだよ」

「そつちががっかりならこつちはびっくりだよ。いきなりなにしがんだ。おお痛え(おでこをさする)」

「(ため息) 新吉。ちよつとこつちに来てお座り」

「だから俺は新吉じゃねえっての！」

「いいからお座り！」

「まいったね、どうも」

「あたしやね、つまらない嘘ばかりついて、人様から小銭をせしめちやあふらふら遊んでばかりいたおまえが、どういう風の吹き回しか商売を始めたっていうから感心したんだ。だからご祝儀だと思つて今朝がたも余計にシジミを買つてやつたんじゃないか。なのはどうだい。おまえがよこしたものと来たら、ほとんど口は開きやしないし、よく見りゃ小石は混ざつてるし……」

「要するに、その新吉つてろくでなしのシジミ売りが、死んだシジミや小石を売りつけたつてわけか。そりゃあ悪い野郎だ。婆さんが怒るのも無理ねえや」

「なんだいおまえ、他人事みたいに。とにかく、ご近所の情けで訴えは起こさないでいてやるから、金だけは返しとくれ。そんでよくよく見たら、あんた新吉じゃあないね」

「はなからそう言つてんじゃねえか」

「目が悪いんだよ」

「杖はしつかり当たつたけどなあ!？」

「なんでまた新吉のふりなんかする」

「そつちが勝手に思い違いをしたんだろうが」

「新吉の家にいるのが新吉だつて思うのは当たり前じゃないか。じゃあおまえさん一体誰なんだい」

「ん？ うん、そこだよなあ、問題は」

「あんた、ひよつとして……」

「違うよ？ 空巢なんかじゃありませんよ」

「まだなんにも言つちやいないけどね」

「あ、痛い痛い。叩かれた頭が割れそうに痛えや。ひでえなあ婆さん。俺はスイカじゃねえんだからよ」

「スイカじゃなけりゃ泥棒だろう」

「違うつての。つくづく早飲み込みなお人だねえ。俺はまあそのくなんていうかかんでいうかく、えーつと……その新吉のく……。そうだ！ 兄貴だ！」

「新吉に兄弟がいるなんて話、聞いたことないよ」

「聞いたことねえか。うん、そりやあそうだろう。なぜかと言えば、人には言えねえ事情があるんだよ。俺と新吉はそのくなんだ、そうそう、おっかあが違うんだ。腹違いってヤツよ。人には言えねえ事情で離ればなれに育てられてなあ。なにしろ人には言えねえ事情だったもんだから、今日の今日まで弟がいるなんて俺も知らなかったんだ。そこで人には言えねえ事情があるもの、まだ見ぬ弟の顔をひと目見たさに、こうして訪ねてきたってわけで」

「そんなに言えねえ言えねえ言われると、かえってその事情とやらを聞きたくなってくるもんだ」

「人には言えねえつつつてんだから、それだけは勘弁しとくれよ。ついでに新吉のことも、この兄に免じてどうか勘弁してやってくれ。話の流れじゃ、あいつは商いを始めてからまだ日が浅いんだろ？ 素人なんだよ。活きのいいシジミを見分ける目が利かねえんだ。きつと悪気があつてのことじゃあねえ。お代はきつちり返させるから、今日のところはどうかひとつ、お引き取り願えやせんか」

「出来の悪い弟を持ってあんたも苦労するね。そいじゃ新吉にはよく言うて聞かせとくれよ？ 頼んだよ」

「へへーっ（頭をふかぶか下げ、おでこをさすりながら顔を上げ）……新吉の野郎。よつぼどのお宝盗んでやらねえと割が合わねえ。……あ？ あんのこうつくババア、裸足で来といて俺の草履履いていきやがった！ おい、こら待て、ババア！」

「誰がババアだつてのさ」

「ああ、すまねえ。姐さんのこと言ったわけじゃねえんだ」

「新吉つつあんは？」

「さあなあ……。出かけ……ちまつてるみてえだな」

「なんだあ、あの半端者が地道に物売りなんか始めたつていうから、冷やかしに来てやったのに。で、おまえさん誰だい？」

「またかよ……。俺はだなあ……」

「ひよっとして、あんたまさか、新吉つつあんの兄さんかい？」

「え？」

「腹違いの」

「……なぜ、それを」

「あらやだ、そうかい。いやあ、なんかこう、見るからに頼りなさそうって
いうか、それでいて小ずるような感じがよく似てるねえ」

「へえ…：そうなのかい…：」

「ちよいと、どうしたんだいそのおでこ」

「これはその、ついさつき、たちの悪いヤクザもんにからまれちまって…：」

「いけないねえ。あんたまだ病み上がりなんだろう？」

「病み上がり？」

「聞いているよ、新吉つつあんから。重い病に臥せってたんだってねえ。でも
すっかり元気そうじゃないか。でこだけ真っ赤に腫れちゃいるけど、顔色も
よさそうだ。新吉つつあんに買ってもらった薬がよく効いたのかい？」

「…：へえ、おかげさんで…：。ウサギのフンみてえな薬が幸いよく効きまして
…：」

「そりやあよかったねえ。あんたも兄さん思いの弟をもって幸せだ。いやね、
新吉つつあんに頼まれたことがあるんだよ。」

『腹違いの兄さんに薬を買ってやりたいから、いくらか都合してくれないか』
ってね。

『腹違いだか種違いだか知らないけど、あんたに兄弟がいるなんて初耳だよ』
って言ったら、『人には言えねえ事情があつて、ずっと離れ離れに暮らして
るんだ。人には言えねえ事情なもんだから、細げえことは訊かねえでくれ』
なんて抜かすもんだから、なにが人には言えない事情だよ、どうせ遊ぶ金欲
しさにいつものデタラメで小銭をせしめようってんだろう？ そうは問屋
がおろすもんかって相手にやしなかつただけどき。今度ばかりはほんとだ
つたんだねえ。新吉つつあんもあれでなかなかいいところがあるじゃないか。
いやいやおみそれしましたよ。疑って悪かった」

「……まあ、あいつも日ごろがそんな有様じゃあ、疑われても仕様がねえや」
「で？ 人には言えない事情ってのはどんな事情なんだい？」

「いいかい姐さん。そいつを俺が言っちゃったら、それはもう人には言えねえ事情じゃなくなっちゃうだろ？ 人には言えねえ事情ってのはな？ 人には言えねえからそう呼ばれているんだぜ？」

「言えないって言われたら余計に聞きたくなるのが人情ってもんでしようよ」

「そうみてえだな。勉強になったよ」

「ちよいとそれ、大丈夫かい？ どんどんでこっぱちになってきてるけど」

「ああ、ほんとだ。たんこぶになってきてやがら」

「そりゃあ冷やしといたほうがいいよ。ほら、手ぬぐい濡らしてやったから。いいかい？ あてるよ？」

「ああ、気持ちがいいや」

「おい！ おみつ！」

「おや、おまえさん」

「なにがおまえさんだ。亭主がいながらよその男に気持ちがいいなんて言わせやがって。よりもよって浮気の相手が新吉たあどういう料簡だ！」

「いやだね、とんだ思い違いだよ」

「新吉この野郎、よくも俺のおみつにちよっかい出しやがって！」

「（殴られ）いてえ！」

「なんだおめえ。新吉じゃねえじゃねえか」

「新吉つつあんの兄さんなんだとき。よく似てるよねえ」

「弟はフーテン野郎で兄貴は間男か。どうしようもねえ兄弟だな」

「間男なんて滅相もねえ。これには人に：言えなくもねえ事情がありました」
「言えなくもねえなら言ってみろ」

「勉強のしがいがねえな……。えーつとですな。弟の新吉を訪ねてきたところ、あつしが病み上がりなもんですから、ちよいと具合が悪くなっちゃまって。そこへ通りかかったおかみさんが、ご親切にも介抱してくださったと、こうい

う次第でして」

「ほんとうか」

「まあ大体そういうことだよ」

「そりやあすまなかつたな。もつたいぶらねえでとつとと言ってくれりやあよかつたのに」

「なに言ってるんだい。わけも聞かずに手をあげたくせに。まったく気が短いんだから」

「だっておめえよお」

「でもちよつとかつこよかつたよ」

「(デレデレと) そうかあ?」

「さ、お酒でも買って帰りましょ。災難だったねえ、兄さん。ほっぺも冷やしておくんだよ? それじゃあね」

「(手ぬぐいを頬にあて) ……ちよいと神様よお。盗人猛々しいと言われりやあ返す言葉もねえところだが、あえて言わせてもらいますよ。バチをあてる相手をお間違えじゃねえんですか? きついお灸をすえるんだったら新吉ってヤツにだろうよ。冗談じゃねえや、なんだって俺がこんな目に…。空巢なんかに入るからだって? はいはい。わかりました。もうきつぱり足を洗いますよ。こんなお仕置きが続くようじゃ、命がいくつあつても足りやしねえや。退散退散つと…そうだ、命はなんとか無事だったが草履をとられちまつたんだった。なんだよ、せつかく洗った足が汚れるじゃねえか」

「(苦し気に) 御免…御免」

「次から次によく客の来る家だなまつたく。新吉なら留守にしてるよ!」

「留守のお人には用がないんだ…。私は隣町の者だがね、すまんが水をもらいたい」

「なんだ爺さん、どつか悪いのか」

「急に持病が出てな。薬をのまなきやならないもんで、水を一杯いただけなにかね」

「水か。水な。えーつと、さつき姐さんが手ぬぐい濡らしてたのが…ああ、

この甕だな。ほらよ、爺さん、水だ」

「ああ、かたじけない。薬、薬：んん？」

「なんだ、肝心の薬がねえのかい」

「そんなはずはない。こんな時のために、家を出るときにはいつも必ず持つてゆくんだ。大事に包んで、財布に入れて」

「：まさかとは思うが、その薬つてのは、ひでえ匂いのするウサギのフンみてえなので、入れてた財布は縞の模様か？」

「確かにそうだよ。どうしておまえさんが知っていなさる」

「さつき道端で拾ったからだよ」

「おお、これだこれだ。知らぬ間に落としていたのか。なんというめぐり合わせだ」

「まあ、俺様には神様の見張りがびっちりくつついてるからよ。これもきつとお計らいってやつだろう。ああ、それとな爺さん。財布に薬を入れとくつてのはあんまり感心しねえなあ。てつきり中身は銭だと思つて、大事な薬がスリに盗まれちまうかもしれねえし、どつかの誰かをぬか喜びさせちまうかもしれねえだろ？」

「（飲み終えて）やれやれ、命拾いしたよ。おや、顔があちこち腫れておいでだね」

「そうなんだよ！ ひでえ目にあつたんだよ！ 聞いてくれるかい」

「いや、聞かずにおこう。その痛めつけられようから察するに、さぞやむごたらしい話だろう。心の臓に悪そうだ」

「なるほどな。ひと様つてなあ、言えねえと言えば聞いてくるが、聞いてくれと言やあ、聞いちやこねえつてわけだ。今度こそコツをつかんだぜ。ありがとよ」

「なにをありがたがられているのか皆目見当もつかないが、礼を言わなければいけないのは私の方だよ。これは気持ちばかりの感謝の印だ。受け取つておくれ」

「金をくれるつてのかい！ 地獄で仏とはこのことだ。爺さん、あんたは仏

さまだよ」

「縁起でもないことをお言いでないよ。おまえさんのおかげで仏さまにならずにすんだんだ。これで膏藥でもお買いなさい」

「まずは草履を買わせてもらおうよ！」

「そんなひどい顔にされた上に草履も買えないでいるのか。寿命が減りそうな身の上話をうっかり聞いてしまわないうちに、これにて失礼するでしょう。草履を買ったら必ず薬も買うんだよ？」

「うひょー！　ウサギのフンが金に化けやがったよ！　水を一杯やっただけで銭が転がりこんでくるなんて、こんな楽ちんなことはねえや。空巢なんかよりよっぽど手間がかからねえじゃねえか。いやあ神様、あんた話が早えや。おまけにわかりやすい。悪いことをすりやあバチが当たる、いいことをすりやあご褒美がある。わかりやした！　これからは世のため人のために生きてみようじゃありやせんか。てなわけで、ご褒美の方、たんまりご用意願いますよ？」

「邪魔するよ」

「はい。なにかお困りのことはございませんか？」

「そんなでこぼこの顔に心配されるほどおちぶれちゃいねえつもりだが、まあ確かに困ってはいるな。新吉がちつとも店賃をはらってくれねえんだ」

「ああ、どうやら新吉ってのはしようがねえ野郎みたいですねえ、おまえも心を入れ替えた方が、きつといいことがあるぜって、大家さんから言っつてくたせえ」

「それはぜひともあなたの口から言っつてやっつとくれよ。おまえさん、新吉の実の兄さんなんだろう？」

「あ、いや、それはちよつと違うんでさあ……」

「ああ、実のじゃなくて腹違いだったかな。今さつきそこでおみつさんから話をきいてね。ところで兄さん、仕事はなにをしていなさる」

「……大家さん」

「なんだい」

「聞いてくださいませ」

「うん、だからこうして聞いているじゃないか。仕事は何だい」

「なんだよ、話が違うじゃねえかよ。えー、俺の仕事は……つい最近、商売替えをしたばかりで、これからは世のため人のため、ご褒美のために身を粉にして働く所存でございます」

「よくわからんが、きちんと稼ぎがあるってことだね？ 怠け者の弟とは違つて」

「あんな奴と一緒にしねえでくれよ」

「そういうことなら、店賃を立て替えてもらおうか」

「……なんで俺が？」

「何度取り立てに来たってちっとも埒があかないからだよ。あいつは春だろうが夏だろうが、懐が寒い寒いの一点張りだ。働きもせずに懐が温まるわけないだろうってんで、シジミ売りの口をきいてやりはしたが、どうせそのわずかな上がりも、つまらん遊びに消えちまうだろう。ここはひとつ、私があるんだから店賃を頂戴する、そんであんたが新吉から立て替え分を払わせる、と。どうだい。これで私の気も休まるってもんだ」

「俺の気はちっとも休まらねえよ。そんなバカな話があるもんか」

「名案だと思いがねえ」

「なんにしてもあいにく今は持ち合わせがねえんだ。気なんか休めず、ここでおとなしく新吉の帰りを待たらいいや。俺はいい加減ここらでお暇させてもらうよ」

「その前に、兄さん、ちよいと跳ねてごらんよ」

「はねる？」

「ぴよんぴよんとそこで跳んでごらん」

「(跳んで) こうかい？」

「うんうん。チャリンチャリンと銭のぶつかり合ういい音がするじゃあないか」

「……なんて悪質な手を使いやがるんだ……」

「それを私によこして、新吉の帰りはおまえさんが待ったらいい」

「あのなあ、これは薬を買う金なんだよ。ほら、俺の顔！ あちこちひでえ有様だろ？」

「ああ、確かに顔はひどい。だがどっちもただの打ち身だな。唾でもつけて風にさらしときゃあ時期に治まるさ。私の唾をつけてやろうか？（指を舐める）」

「冗談じゃねえ！ そんなもんつけられた日にゃあ、治るものも治らなくなっちゃう！」

「まあそう言わず。ほほう、こりやまたずいぶん立派なたんこぶだ。どれ、直接舐めてやろう」

「やめろやめろ！ わかった！ 金は渡すから！ とつとと帰ってくれ！ ほらよ！」

「これは助かった。私も野郎の腫れあがったおでこなんぞ、できれば舐めたくないからな。どうも邪魔したね。お大事に」

「……なあ、神様。この町内には、極悪人しか住んじやいねえのかい？ 天涯孤独で気楽だった俺の人生が、どこをどう間違っってこんなことになってんだ……。うつつ（と手ぬぐいを目に当てて泣く）」

「おいおい！ 人んちに勝手に上がり込んでなにをメソメソしてやがんだ」

「てめえが新吉か！ この悪党の親玉め！」

「誰だおめえは」

「新吉の兄さんだよ！ 腹違いのな！」

「俺にはそんなものいやしねえよ」

「おみつさんに言っただろうが！ 腹違いの兄がいるって！」

「ああ、ありやあちよいと小銭欲しさにでまかせが口をついて出たんだよ」「ほれみろ。そうやってつまらねえウソで誤魔化そうとするとこなんざ俺とそっくりじゃねえか」

「わけのわからねえこと言ってねえで出ていきやがれ！」

「いいや、出ていかねえ！ 草履がねえからなあ！」

「知らねえよ」

「それになんたって俺は、兄としてここの家賃を立て替えてやってんだぞ？」

「だから俺には兄弟なんていねえんだって」

「おめえが弟じゃねえんなら、なんの因果で俺はこんなひでえ目にあわなきやならねえんだよ！」

「確かにひでえたんこぶだ。そうか。打ち所が悪くて頭がおかしくなっちゃまってんだな。おい、大丈夫か？ お医者を呼んで来てやろうか？」

「なんだ新吉、やさしいところもあるんじゃないか。そういうことなら神様だっておめえのことを見捨てたりしやしねえよ。ただし、これ以上兄さんを泣かせるような真似をしてりゃあ、おめえもきつと信じられねえような痛い目を見るぜ？ そんなことにならねえうちに、さあ行くぞ」

「行くってどこにだい」

「活きのいいシジミを採りにだよ！」